

大学における地域社会参画型教育

— 大学教育改革プロジェクト「ENIWA学」における朗読劇『漁川物語』上演を事例として —

加藤 裕明・吉岡亜希子・笠見 康大・鈴木 敏正

抄録:本稿では、北海道文教大学における教育改革プロジェクト「ENIWA学」の実践、特に地域のホールにおいて、地域の自然と歴史を題材とした『漁川物語』を朗読劇として上演する文化活動を対象とし、その活動過程における学生の経験と、教員の支援のあり方を、各種の記録をもとに分析し、明らかにした。その結果、第一、学生は地域の歴史や文化に接し、朗読劇を上演する活動を通して、地域の人々と交流し、地域に対する認識を深めた。第二、第一と関連し、その経験を通して学生は、上演という目的に向かって仲間と力を合わせ協働するモチベーションを徐々に高めていった。第三、プロジェクトの実施により、大学教育を地域に開かれ、文化を創造していくための場とする方法を示した。次に、研究の結果明らかになった教員の支援に関する課題を、以下二点にまとめる。第一、学生がより一層主体的に地域文化の創造に参画するための支援のあり方を検討していくこと。第二、学生が地域文化の創造に向かって、モチベーションと協働性をさらに高めていくことができるような支援を構築していくことである。具体的には準備段階から地域の人々と連携していく機会を増やしていく支援の実践に課題がある。

キーワード: 地域社会参画型教育, 大学教育改革, 「ENIWA学」, 『漁川物語』

1. はじめに

本稿の目的は、地域社会に参画する活動を通して、大学における教育改革を構想し、学びを促進する教員の支援のあり方及びその課題を明らかにすることである。

「持続可能な開発のための教育に関するグローバル・アクション・プログラム」(GAP)¹⁾の現代的意義を、幅広い視点から整理した鈴木(2019)は、「持続可能で包摂的な地域づくり」には「参画型市民性教育」が不可欠であると主張する。筆者らはその主張に基本的に賛同するものである。しかし現実の大学生に目を転じてみると、学内の授業で完結し、それ以外はスマホ利用に時間を費したり、あるいは実社会との関わりとしてアルバイトに止まっている学生が少なくない。²⁾また、近年の大学生には「生徒化」と呼ばれる傾向が指摘されている。³⁾杉谷(2018:59)は「生徒化」した学生を「学業に対して受動的な姿勢を示し、教員による指導を求める傾向にあるとともに、実用性のある教育内容を志向する受益者感覚が強い存在」ととらえ、その傾向は年々強まっているとする。筆者らの勤務する大学においても、このような学生の傾向を無視できない。大学内の机上の学習に終わることなく、地域に出て活動し、自ら課題を探求していく学生を育てたい。

本稿で取り上げる「ENIWA学」は、以上の問題意識から開発された教育改革プログラムである。大学生が地域で活動し、学びを深めることをねらいとした教育プログラムの先行実践は、PBL(Project Based Learning)すなわち課題解決学習として各地域で活発に展開されている。特に大学の立地する地域の企業と連携してつくったプロジェクトに学生を参加させ、その学びを「社会人基礎力評価表」⁴⁾を尺

度に測ろうとするもの（花田ら 2012, 山岡 2014), あるいは, NPO が運営する地域貢献活動のコンテストに学生を参加させ, 企画したプロジェクトを競わせるもの（豊田・内平・井関・中嶋 2014), さらには, 「全国まちづくりカレッジ」と呼ばれる大学と地域との協働により, まちづくり活動を展開し, その中で学生の学びを「社会人基礎力」を基準に測ろうとするもの（舛井 2019) など, 活発な実践研究が展開されている。⁵⁾

いずれも意欲的な大学教育の実践である。これらの実践研究に見られる特徴は, (1) 経産省の「社会人基礎力評価表」に代表されるような外的基準により, 学生個々の活動を総括的に「評価」していること。(2) 活動の途中で学生がいかなる経験をしたのか, その過程が見えにくいこと, である。特に (2) に関し, 活動の中で編成されたグループの中で, 自発的に参加した学生と, モチベーションの低い学生との取り組み姿勢の落差が指摘されている（豊田ら 2014: 65, 山岡 2014: 192) が, このモチベーションの低い学生は, どのように活動に参加していくのだろうか。「社会人基礎力」の第三には「チームではたらく力」があるが, 参加者相互の協働性は量的な基準では図りづらいものであるし, また「社会人基礎力」自体, 個人がいかに企業の課題に適応⁶⁾できるかといったものさしであり, 集団の協働関係を計ることは難しい。仲間と築く関係は, 参加者自身が他者と協働していく経験の質を記述することがまず必要であろう。

以上の整理をふまえ, 本稿では, 筆者の勤務する北海道文教大学の学生を対象として, 文化創造の視点から地域参画活動に取り組んだ。その過程において, 教員は, 学生の学びと関係づくりをみすえ, どのような支援を行ったのか, そのあり方を具体的に記述し, 課題を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

本研究で採用する研究方法は, 以下三つの研究法を組み合わせた方法である。

第一, アクションリサーチである。アクションリサーチとは, 研究が計画, 実行, 観察, 省察の4つの過程をともなって進行していく研究法である。研究者自ら実践者として活動に参加し, 目標や課題を達成するために実践をより良いものへと発展させていく実践的研究手法である。

第二, エスノグラフィーである。エスノグラフィーとは, 「民族誌的調査」(佐藤 2002:10)と訳される。この手法にもとづき, 各種のフィールドノート(参与観察, 半構造化インタビューの記録等, 様々な記録の総体)をもとに, 筆者を中心とする「ENIWA 学」の教員が, 学生の活動をどう支援したかに焦点をあて記述することとする。

第三に, 反省的実践家事例研究法である。反省的実践家事例研究法とは, よく知られるようにショーンが提唱した「反省的実践家」(ショーン, 佐藤・秋田訳 2001)の概念を事例研究法に取り入れたものである。「反省的実践家」とは, 自分の実践を未だ発展途上にあるものにとらえ, 反省的な思索を加えながら現場におけるより良い実践の方向を探っていく実践家を意味する。この方法を用い, 本研

表1 本文で用いる記録・資料一覧

- | | |
|---|----------------------------|
| ① | 教育活動実践記録 (以下「実践記録」) |
| ② | ENIWA 学活動記録ノート (以下「活動ノート」) |
| ③ | 学生向け質問紙調査 (アンケート) 回答記録 |
| ④ | 学生向け半構造化インタビュー記録 |
| ⑤ | 『漁川物語』観客アンケート回答記録 |
| ⑥ | 『千歳民報』報道記録 |
| ⑦ | 『北海道新聞』報道記録 |
| ⑧ | ラジオ放送記録 |
| ⑨ | ビデオカンファレンス記録 |

究では事例の分析を反省的、批判的に行い、叙述していく。以上三つの研究法を組み合わせ、多元的な研究法を用いて分析を行う。そこで、表1に、本研究で活用する記録及び資料を一覧にして示す。①は、加藤自身が記録した活動実践記録である。②は、ENIWA学に関わる教員・学生が、フィールドワークやワークショップ等の活動に参加する際、携行した8分冊からなるB5版大学ノートである。本稿では他の記録とも照合した上で、引用に際しては加藤の記録を用いた。③は、参加した学生が、活動に関する思いや考えを記したアンケートの回答である。提出は研究活動に賛同する場合のみで任意とした。④は、ENIWA学参加学生に対し行った半構造化インタビュー記録である。前もって研究趣旨を説明し賛同した対象者にのみ実施した。⑤は、来場した観客から得た無記名、提出任意のアンケート記録である。⑥⑦は、『漁川物語』の準備と上演に関し報道された新聞報道である。⑧は、FM放送e-niwaスタッフが採録した朗読劇『漁川物語』のラジオ放送記録である。この中には、当日の観客として来場した、『漁川物語』の原作者である吉弘文人氏及び氏のかつての「教え子」で、『漁川物語』の共同制作者に対するインタビューが含まれている。⑨は、「ENIWA学」共同実践研究者である加藤・吉岡・笠見が、『漁川物語』上演後の打ち上げ交流会の様子を記録した動画を視聴し、そこに学生たちのいかなる経験を読み取ることができるかを確認し、まとめたものである。

以上、本研究で用いる記録及び資料を整理した。以下、本文中に各記録・資料の典拠を示す際、その活動がいつ行われたのかを明らかにするため、記録・資料番号及びそれが記された西暦年及び月日を記す。例えば、記録①に、2019年12月12日に記された記録ならば、【①20191212】というように資料番号と8桁の数字で示すこととする。また引用に際し、発話のニュアンスや行為等を補う場合には〔 〕内に示す。なお本文に言葉を引用した学生にはすべて、研究の趣旨を事前に説明し、氏名をすべてアルファベット表記した上で引用することの許諾を得た。

3. 研究対象の概要

3.1 「ENIWA学」の目的

本研究で対象とする「ENIWA学」⁷⁾とは、大学の立地する恵庭市に関わる文化的事象に焦点をあて、考察する地域学である。同時にENgeki In Workshop and Activityの略⁸⁾でもあり、演劇学でいう「ポスト・ドラマ」的な方法⁹⁾を用い、恵庭の文化的事象を幅広くとらえ表現・発信していこうとする実践的活動をもさす。さらにアイヌ語のエ(エ)ン・イワ(尖った・岩)にかけ、学内のみの机上の学びに埋没しがちな学生に、地域の課題に鋭く切り込む活動性を獲得させようとする教育改革の理念を表象するものでもある。

3.2 活動の経過及び参加者

「ENIWA学」の活動経過¹⁰⁾及び参加者を抜粋し表2に示す。2019年8月からの募集だったこともあり、「ENIWA学」への自主的な参加の学生は1年のAと4年のEの2人と少なく、加藤が担当する基礎ゼミ生(8名)を加えて行うこととした。自発的な参加者は動機も明確だが、ゼミ学生の中には、朗読という形で探究結果を発表することに対し消極的な者も少なくなかった【②20191225】。モチベーションに差のある学生集団を、どのように他者と協働させ、朗読劇へと参加させていくかが、教員の支援の中心的課題である。ENIWA学において、学生の活動を支える教員は加藤のほか、吉岡亜希子、笠見康大、鈴木敏正の4名¹¹⁾である。4名は、基本的に活動前に集まり、学生が活動するにあたり、

どのように準備を進めるかを議論し確認しあった。本稿にあたっては事実経過及び学生の活動の意義等について確認しながら執筆した¹²⁾。

4. 「声の文化」としての朗読劇『漁川物語』創造に向けた支援

4.1 「声の文化」としての朗読

「ENIWA 学」の目的は、地域の文化的課題を明らかにすることに加え、文化を創造することである。ここでいう「文化」の要素としては、特に「声の文化」を重視した。「声の文化」とは「文字の文化」からは独立した文化である。歴史上「文字（書字）の発明」の画期性については言を俟たない（例えばハラリ 2016：158-161, 2018：196-199）。が、「文字の文化」は「切り離す感覚」であるのに対し、「声の文化」はハーモニーとして「統合する感覚」に満ちている。そして19世紀まで、テキストを声に出して読むことは人々の習慣となっていた（オング 1991：72-74, 153-154）。ゼミ生の、朗読に対する消極性は、「文字による教育」に比重のかけられた現代日本の教育の帰結と言ってよい。清水は、19世紀デンマークの教育哲学者グルントヴィの思想を紹介し、「死んだ文字の書物による教授、暗記、詰め込み」の「死の学校」と、「生きた言葉で語り合う」「生の学校」とを対比している（清水 1993：102-103）。またグルントヴィの影響を受けて教育実践を展開したコルは、「物語を語るという方法」によって、歴史や聖書が物語として語られ、子どもたちの想像力や感情に働きかける重要性を述べている（コル、清水訳 2007：95-97）。さらに児玉（2016：4-5）は、「身体的な声を通じた表現教育が、すべての教育機関に一貫して取り入れられていた」と述べ、グルントヴィとコルの教育理念に代表される「声の文化」重視の理念が、現代デンマークの学校教育においてもその基層として存在することを報告している。『漁川物語』を学生とともに朗読劇として上演する背景には、「文字の文化」を相対化し、「声の文化」に光を当てる教育学的知見をもふまえている。同時に、筆者は、地域を調査するのみならず、地域で文化を創造する活動へと至る社会参画活動としてこの朗読劇を位置づけた。当初、プロジェクトのキャッチコピーを、学生に提案させた際、A が提示した言葉が「発信（進）」だった。この「発信」は参加者募集のためのチラシの標語「地域が持つ価値を『発見・創造・発信』する」に取り入れられた。

A は、大学の授業だけで満足するのではなく、外に向かって発信していくために、自分たちがまず進んで行動していくべきだと語った。筆者らは、この A のような意欲的な姿勢をさらに伸ばし、他のゼミ生にも広げたいと考えた。

表 2 2019 年「ENIWA 学」活動内容・参加者数・態様

活動内容	参加学生数（態様）	一般参加・観客等
フィールドワーク① （恵庭市民活動センター）	3（自主参加）	
フィールドワーク② （恵庭市立図書館）	2（自主参加）	
フィールドワーク③ （恵庭市郷土資料館）	7（ゼミ参加 6, 自主参加 1）	
児童劇団「絆花」への支援	2（自主参加）	
講演会（平田オリザ 「読書・演劇・まちづくり」）	2（自主参加）	51 名
演劇ワークショップ（平田）	5（自主参加）	39 名
朗読劇『漁川物語』上演	10（ゼミ参加 8, 自主参加 2）	55 名

4.2 『漁川物語』の梗概

では、「発信」する演劇的題材は何が良いか。筆者は A らとともに模索していた。2 回目のフィー

ルドワーク（恵庭市立図書館本館）が終わり A とも確認したことは、地域の題材を演劇的な形にすることだった。『漁川物語』¹³⁾ は、1991 年当時の恵み野小学校 6 年の児童（「漁川保護少年団」）46 名が、担任の吉弘文人の指導のもとにまとめた作品である。「少年団」は地域の人々に取材し、日常的な遊び場として親しみ愛していた川の歴史を聞き取った。そのうえで、漁川をめぐる自然と動物、アイヌ、和人とのかかわりをカワセミの目を通して語る物語として創造した。初版本は、物語を分担した各児童の直筆がそのまま印字され、児童の手になる版画も掲載されている。¹⁵⁾ 現在で言えば、スケールの大きな「総合的な学習の時間」の実践と言えるだろう。吉弘自身の言葉によれば「今ではなかなかできない」教育実践である。その通りかもしれないが、多忙化する現代の学校の中で、矮小化されつつある現在の総合学習をはるかに超えるような視点を学び取ることができる実践である。『漁川物語』を A に提示し感想を聞いたところ、A は「よく見つけましたね。これを ENIWA 学でやる〔上演する〕のは、すごくいいと思います」と語った【② 20190910】。

4.3 『漁川物語』上演までの支援①—朗読台本の作成

筆者は、担当する基礎ゼミの学生 8 名と自主的参加の A 及び E を加えた 10 名で『漁川物語』を朗読劇にすることとした。基礎ゼミは、大学の初年次教育として、読解力、資料探索力、表現力を身につけることを目的とし、「フィールドワーク」「発表」「表現」によって主体的で活動的な学びを到達目標としている。ENIWA 学の活動方法や教育目的とも重なる部分が多い。そこで筆者は、ENIWA 学にもとづく活動が、基礎ゼミにもふさわしいこと、大学教育のみならず、地域における文化創造にも大きな意義があることを説明し、学生の参加意欲を高めることを意識的に行った。

『漁川物語』は、小学六年生が分担して物語を作っていたため、内容や情報に重複する部分がある。そのまま朗読したのでは 3 時間を超える長さになるため、原作者の吉弘氏と「漁川保護少年団団長」の内倉新五氏に、朗読劇のための潤色¹⁴⁾と研究の許諾を得た。二人から快諾を得たうえで、筆者は主として授業が終わった放課後、A 及び E とともに潤色作業を進めた。重複部分を可能な限り削り、しかし原作の趣旨を生かすよう新たに言葉をつけ加えることは極力避ける、という方針のもと進めた。また学生にも参加への主体的な意志を持って欲しいとの願いから、潤色方針を伝え、作業に加わらせた。希望と抽選によって割り当たった章を、学生各自に Word によるデータで提出させた。¹⁶⁾ それを加藤が整え、朗読台本を構成した。

4.4 『漁川物語』上演までの支援②—集団づくりの支援の不十分さ

朗読劇は大がかりな舞台装置や華やかな衣装は必要ない。そのため、演劇経験のほとんどない者が大半を占める集団にとって取り組みやすい簡便な演劇形式である。とはいえ、集団としてひとつの舞台をつくりあげることに変わりはない。そこで、稽古するにあたって筆者が学生に伝えたことは以下の 2 点である。(1) 『漁川物語』の上演は、一つの舞台をつくる協働的な集団活動であるから、安易な個人的欠席や遅刻は戒められなければならないこと。(2) スタッフの分担を決めるので、ひとつの舞台に向かって各自責任を果たしてもらいたいことである。いま、表 3 に、朗読劇の参加者を示す。自主参加をのぞく 8 名のうち 7 名は幼稚園教諭あるいは保育士を、1 名は小学校教諭、を目指す学生である。いずれにしても、将来、子どもたちを前に堂々と朗読や語り掛けの技術とところを身につけておきたい。そこで筆者らは、学生の主体的参加によって学びを豊かなものにするため、分担するス

スタッフを立候補形式で決めさせた。役割は、演出・制作・大道具・小道具・音響・照明の6つである。したがってそのうち2つは2人で役割を担うことになる。演出は劇づくりのためのリーダー的存在であり、活動を進める責任があること、制作は広報担当として、作品を世の中に広める役割を担うこと、大道具は舞台上に必要なイスを用意すること、小道具は、朗読者が手に持つ台本を市販のキットを用いて製本すること、音響はキーボード演奏及び機材のセッティングの手伝い、照明は当日入るプロの照明スタッフの手伝いをするなど、等の概略を説明した上で立候補をつのった。だが、肝心の役割分担を決定するゼミ当日3名が欠席した。その結果、比較的仕事量の軽いと見られた役割から「立候補」が集まり、最も責任の重い演出と制作が空席となった。学生の役割選択の動機は、どれが「一番楽」な役割であるかということであった。このような役割選択からは創造的な活動は生まれにくいことが予想される。その仕事を理解し、自ら創造性を発揮できるよう役割自体に参加者の意志が反映される必要がある。今回はそのような支援は充分には出来なかった。

以上の過程をへて、演出になったのはIとJである。上述した通り、演出は活動全体を進める責任がある。演劇づくりの経験のない学生には、朗読者をまとめ、稽古を進めるという難局が待っていた。

朗読の稽古は以下のように進めた。まず加藤が、普通教室において呼吸と発声のレッスン¹⁷⁾を行った。当初、学生の発声はか弱く小さかった。か細い声で棒読みにししか聞こえない者もいた。「アナウンサーのようなきれいな声や読み方でなくてもいいので、作品世界を感じとり、明るく元気よく読んで欲しい」【①20191001】といった筆者の要求にはほど遠かった。のちに活動の様子を見た笠見は、「作品から何かを感じとろうとする気持ちが見えない」と評した。その後、HとJが加藤研究室にやってきた際、今後の活動のすすめ方について、以下のように提案した。

H どうやったらAのように読めるようになるんですか。ちょっと読んでください。〔加藤読む〕

へーなるほど。でも、“間”とかあけられないんですよ。〔なんで?〕怖くて。恥ずかしいし。

今日の〔ゼミでの朗読〕聞いてましたよね?みんなただ読んでるだけです。あるひとなんていつもグチってますよ。やりたくないとか。先生がやるぞーって強く言ってくれればのに。

T でもそれだと大学生の活動じゃなくなるよね。

H まあ確かに。でも、高校生って「あの先生嫌いー」ってなってまとまるじゃないですか。そういうのはあると思うんだけど…。

T ポジティブにまとめられるかどうかだね。

H 高校時代の学祭とかも、最初はイヤダイヤダって言ってたのが、クラスの男子たちが引っ張って行って、ああ盛り上がってよかった楽しかったってなったし。拍手もらえたらうれしかったし。

J ライト浴びて輝きたい。〔笑〕

T 舞台は自己肯定感が高まるんだよ。

J そうですよ。よし、Hが助けてくれるんなら〔中心になって〕やろうかな。

T 全部自分ひとりで責任負う必要はないよ。みんなに助けてって言えばいいんだよ。

J わかりました。でももっと広いところで練習したほうがいいと思います。みんな声ちっちゃいから。普通教室だったら「これくらいでいいわ、聞こえる」って思っちゃうんです。

H そうそう。

J それから、練習方法変えていいですか?

T いいよ. どうやるの?

J [少し考えてから] まず, 各自で自分の読みを練習して, 間とかもチェックして, それから全員で読み合わせるって言うふうに.

T いいね. じゃ, ホールを予約しておくから. ラインで早速みんなに伝えて. 【② 20191119】

上記の対話が見していることは, 以下の三点である.
 第一, 練習の段階では, 学生には作品を声に出して読む(朗読する)行為(「声の文化」)に抵抗感があること.
 第二, 練習の段階では, 学生の朗読活動へのモチベーションは低い. したがって主体的にはなかなかできないこと.
 第三, 学生は朗読活動を非日常的なもの〔特別なもの, 祝祭的なもの〕ととらえていること.

表3 『漁川物語』各スタッフ及び朗読部分

学生	スタッフ	朗読部分
A		1章
B	照明	2章
C	大道具	3章
D	大道具	4章
E		5章
F	キーボード演奏	6章
G	制作	7章
H	小道具	8章
I	演出	9章
J	演出	10章
全員による群読		11章

以上の三点をふまえ筆者は今後の活動目的を, とにかく元気な声で朗読すること, そして主体的に集団活動を行うこと, それらに対する抵抗感をなくすことにおいた. 練習は大学のホールで行うことにした. ホールでは計5回の活動を行った. IとJに演出として練習法を考え, 提案するよう伝えた. Jは, 朗読の動画を撮影しそれをグループLINEに送り, 各自で読みを確認, 練習するのがいいと言った. 1年生とは言え, 将来, 幼児教育・保育を目指す者たちである. 力強い「声」は確実に獲得しておきたい. 毎回, 通し稽古をし, 途中どうしても聞き取れないような箇所だけは繰り返させるようにして活動を進めた. この過程で筆者は, できるだけ学生のモチベーションを高くするため, 「いいね!」「そうそう!」などという肯定的な言葉を発した. そして通しが終わると, 毎回拍手をした. 同時に「本番まであと〇日」「リハーサルの日にはマスコミ取材が入ります」というように, 多くの市民が注目していることを意識させた. 練習の様子を伝える地元の新聞報道では, 「朗読劇『漁川物語』上演へ

22日本番に向け熱」という見出しのもと記事が大きく掲載された. その中には, 「〔恵庭〕市外出身の人にも自分の故郷の風景を重ねてもらえたら〔うれしい〕」, また, 「恵庭地域を理解するきっかけになった. 多くの人に漁川を知ってほしい」という学生の談話も記録されている【⑥ 20191213】.

ホール練習を通し, 発表者の声も少しずつ通ようになってきた. 12月11日のリハーサルで初めて学生の朗読を聴いた吉岡は, 「ちゃんと出来てるじゃないですか」【① 20191211】と加藤に語った. しかし, 筆者には一抹の不安があった. 12月11日のリハーサル時に, 他にもないIとJが欠席したのである. Jからは体調不良で欠席という連絡が入ったが, Iからは連絡はなかった. リハーサルは大切だから, 演出として全体をまとめ活動を主体的に進めるよう伝えてはいたが, そのような形になり, 果たして本番で上演できるのかという思いが加藤の頭をよぎった【① 20191213】.

演劇づくりは継続的な集団づくりでもある. 教員は, この集団の人間関係がしっかりと築かれ, 学生が伸びやかに活動できる環境を整えるよう支援することが必要である. しかし, 本番の10日前の状況からは, 集団を育てる支援が加藤らには不十分であった.

4.5 『漁川物語』 上演当日の支援

漁川保護少年団製作、吉弘文人発行、恵庭学¹⁸⁾潤色『漁川物語』は、2019年12月22日(日)15時、恵庭市民活動センター(えにあす)ホールで上演された。当日の集合時間は12時だった。自主参加のAは筆者と共に9時、会場に入り舞台の設営を行った。Eは10時半に入り音響機材の設営をした。演出のIが到着し、AとEの手伝いをした。その後、学生たちは三々五々会場入りした。ただし、演出のJが台本を大学に忘れてきたため、F・Hとともに少し遅れて会場入りした【② 20191222】。このような状態だったが、照明と合わせてなんとか通し稽古を終えた。

開演時間が近づくにつれ学生の中に高揚感が生まれていった。開場前、学生達は控え室に移った。移る前に加藤は、開演前までまだ30分以上あるので、演出が中心となって控え室でストレッチをしたり、発声をしたりして時間を有効に使うよう伝えた。これまで集団活動をリードすることができなかった二人だったので、最後のチャンスとして集団的な活動をリードしてもらいたいと筆者は願った。後に、Jは、加藤のインタビューに答え、「控室では、発声の方法はよくわからなかったので出来ずにだらだらしていたら、Eさんがやってきて何かするの?と声をかけてくれたので、じゃあみんなでも知ってる歌を歌おうってことになり『アナと雪の女王』を歌いました。」と語った。Hは控室の様子について、「みんな笑い合っていました。元気が良かったです。終わってからも漁川のメンバーでごはん行こうねってなったくらいとても仲が良くなりました。この前自分が欠席したときも、配布物をわざわざとっておいてくれました。今まではそんなことなかったのに。絆が生まれました。びっくりしました。」と言った【以上④ 20191226】。朗読劇本番当日に学生たちの間に良い人間関係が生まれた瞬間を語ってくれた。

14時半過ぎ、原作者の吉弘氏、そしてかつての「漁川保護少年団」の4名、さらには同少年団「团长」の内倉氏の御母堂¹⁹⁾が来場した。前もって伝えてはあったが、IもJも笑顔で両氏に挨拶し、上演後の感想について快諾を得、満足と高揚感を得ていた様子であった。筆者は、学生を地域社会に参画させるためには、何より地域の人々と直接接する機会を設ける支援が必要と考えていた。そのため、開演前・終演後の観客との交流を重視した。開演前、Iは、「みなさんの心を動かせるような朗読を目指して練習してきました。想像をふくらませながらお聞きください」とあいさつした【① 20191222】。Iは、リハーサルを欠席していたが、本番では上記のようなあいさつをつとめあげ、さらに上演後も最後まで会場に残り、率先して後片付けを行った。そして上演後のアンケートには、「自分の経験として学ぶことができ、大学で先生の話を書くのと、経験することが違うと思う」、更に「恵庭について全然まだまだ知らないんだと思いました。もっと恵庭について関わり、知りたいと思いました。」と、地域における学びへの意欲を記した【③ 20191222】。地元出身者である人間が必ずしもその地域について深い認識を持っているわけではない。が、Iがそうであるように、一端、地域における文化行動へ参画すると、学生たちはその地域に対するレリバンス(現実とのかかわり、意義の認識)を深める。その経験がIの行動を変容させた。それは他地域の出身者にもあてはまる。例えばHは、アンケートに「大学では出会えなかった方に出会えて視野の広がりを感じた。地域を学ぶことで恵庭で過ごす日々が楽しくなった。川の歴史があるようにいろんなものにお話しがつかまっていると感じた。」と記した。またJは「本当に初めて色々な人と出会うことができた。自信につながるあらたな感じ方、思い方をできました」と記した【③ 20191222】。後日インタビューに対して、Hは「ひとつひとつの小さな町にも掘り出し物があると思った。ここ〔毎日大学へ通う道〕にもアイヌが歩いてい

たのかなって、ふと浮かんだ」と、地元ではないが今住む地域への関心を語った。またJは、「[これまでは地域の活動には]何も参加してない。バイトしてるからいいやと思ってたけど、『漁川保護少年団』とかの人に会えてうれしかった。バイトは年齢層が同じ。大人と関わることもない。深く話することもない。」と、アルバイトと、地域における文化活動との違いを言葉にした【④ 20191226】。

終演後、吉弘氏と内倉氏に感想を語ってもらうとともに、会場で打ち上げを行い、観客と学生とが交流する時間を設けた。打ち上げの席上、吉弘は、「『漁川物語』は1991年につくられたものだが、今日の朗読は、あなたたち自身の『漁川物語』となった。文化はこうして受け継がれていくんだなあと思った。」と語り【② 20191222】、またアンケートにも同内容を記した【⑤ 20191222】。さらに、かつての「漁川保護少年団」のひとり、「このような形で地域の文化を掘り起こす形を通して、恵庭っていいなあって思ってもらえればうれしいし、恵庭に住もうって若い人が増えてくれるとうれしい」と語った。また共同研究者の鈴木は、学生に向け『漁川物語』には地域の歴史、環境を素材とする教育的な要素が盛り込まれている。ぜひ今後もこの活動を続けて欲しいと語った。【② 20191222】

後日のインタビューにおいて、JとHは、ホール出口で観客を見送ったとき「『良かったよ』とか『朗読に感動したよー』等の言葉」をもらい、「やってよかったと思った」と、その肯定感を口にした【④ 20191226】。活動への肯定感はまた、記者から取材を受けたことも関係している。上演後、『北海道新聞』の記者は、会場で学生ひとりひとりに取材し、「恵庭の小学生が91年に創作『漁川物語』朗読劇で復活」という見出しの記事を書いた。そして「学生たちは今年8月から恵庭の歴史にまつわる題材を探し、「上演にあたりサケ漁が盛んに行われていたことなど漁川の歴史を市郷土資料館で学んで理解を深めながら原本を再構成し、カワセミの喜びや悲しみを10人で演じ分けた」と、学生の活動過程を記した【⑦ 20191224】。さらに、当日の上演は、2020年1月2日、FMe-niwa77.8MHzで放送された【⑧ 20200102】。地元のメディアではあるが、新聞・ラジオといったメディアに紹介され、地域社会における自分たちの文化行動の意義を学生は感じとっていた。ラジオ放送当日も、演出のJは加藤に放送時間を確認してきた。また制作担当のGは取材に丁寧に対応し、自分たちの活動を詳しく説明した。Hは「新聞とか自分が思っている以上に注目されて、努力が報われたーと思った。」と語った【④ 20191226】。

後日、本稿をまとめるにあたって、笠見が撮影した上演後の打ち上げ・交流会の様子（動画）を加藤・吉岡・笠見の3名で確認した。動画から読み取ることのできる学生の経験を、ビデオカンファレンスした結果、DとFが常にペアリング（一つのイスにDがFを抱っこ）しているのは、他のメンバーとつながることを苦手とする関係性を示すのではないか。主体的な集団活動が生まれていない状況が見て取れるのではないかという指摘（加藤）に対し、ふたりの表情は笑顔であり、いきいきとしている。経験したことのない演劇後の打ち上げという席上、防衛的な心理からそのようなふるまいになっているのではないか、という解釈（笠見）が生まれた。一方で、そうであったとしても、演劇の素養なく、モチベーションも低かった学生が、同じ演劇作品を通して感動した胸の内を語り合う場を経験することは、現代社会ではなかなかないことである。演劇だからこそ、地域の人々と学生がつながる場が生まれた。この打ち上げの場があることで、地域参画活動の大きな意義が生まれたという指摘（吉岡）が生まれた【⑨ 20200210】。また鈴木は、自分も地域の歴史や環境に目を向けよと講義では訴えているが、なかなか学生には浸透しない。だが、『漁川物語』を経験して、学生の地域の歴史に対する認識が深まった。実践的研究者はそこに着目すべきであると述べた【② 20200403】。

5. むすび— 考察と課題 —

以上、ENIWA 学による地域参画型教育に関する学生の活動の実際と教師の支援を明らかにしてきた。この活動と支援の成果をいま三点にまとめる。

第一、講義とは異なり、地域の歴史や文化に接し、それを朗読劇（「声の文化」）として上演していく活動により、学生は地域の人々と交流し、地域の歴史や環境への認識を深めた。

第二、地域の人々から認められ、つながっていく実感を得る中で、仲間と「力を合わせることを学【③ 20191222】び、気持ちの高揚感やモチベーションの向上をも感受した。

第三、今回のプロジェクト「ENIWA 学」と「基礎ゼミ」との連携により、大学の授業や活動を地域をフィールドとして展開し、文化を創造していく場とする方法を示した。

次に、活動に関わる支援のあり方としての課題を、以下二点にまとめる。

第一、今回の支援は、学生を地域文化活動に参画させることはできたが、学生自身がより主体的に地域行動に参画すること、特に、学生が自ら地域の中の課題を発見したり、あるいは課題解決のために行動するような、より主体的な活動に向けた支援のあり方を検討していく必要がある。

第二、今回の朗読劇『漁川物語』の上演を通して、学生は仲間と力を合わせることを学んだが、より協働的な集団活動としてはなお課題が残った。集団づくりの重要性を学生がより深く認識し、地域文化の発信を協働的に行うことができるような支援を構築していく必要がある。

以上の課題を見据え、今後も地域における歴史と文化を発見・発信していく教育活動を目標に、より豊かな学びを得られるよう大学教員としての教育、支援のあり方を探究していきたい。

注

- 1) 2014 年第 69 回国連総会での採択。
- 2) 大学生のアルバイト就労率は年々増加傾向にあるが、第 55 回学生生活実態調査（全国大学生生活協同組合連合会 <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report54.html>）によれば、2019 年 10-11 月調査時点でアルバイトを「している」大学生は 75.8% にのぼる。北海道文教大生を対象とした「令和元年度 学生生活実態調査アンケート」の集計結果によれば、全学科で 71% の就労率である。アルバイトの頻度では週 3 日（36%）と週 4 日（26%）が最も多く、時間では 1 日 5 時間（30%）と 4 時間（24%）が最も多い。また、北海道内にある私立大学の学生を対象としたスマートフォンの使用時間に関する調査では、1 日の平均使用時間は、「1～3 時間」38.6%、「3～5 時間」35.2%、「5 時間以上」21.3% 等の順であった（伊熊克己 2016）。『漁川物語』に参加した 8 名のゼミ生に対する調査結果ではアルバイト就労率は 75%（6 名）、スマホ使用時間は 1 日平均 2.94 時間であった。一方、ボランティアやサークル活動など放課後活動にあてる時間が 0 時間であると答えたゼミ生は 8 名中 6 名であった。
- 3) 今から約 20 年前に大学生の「生徒化」を指摘した伊藤（1999：92）は、「生徒化」の要件を、自分にはまだ学ぶべきものが多く残っているとする「未熟性」、学ぶべきことは自分で探求するのではなく、大学（学校・教員）側が用意してくれるものであるとする「他律性」「依存性」、そして自ら「生徒」であると位置づけ、行動するため他の側面が希薄である「一面性」という三点をあげた。
- 4) 「社会人基礎力」とは、2006 年に経済産業省が提唱した概念で、「前に踏み出す力」、「考え抜

- く力」, 「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成された, 「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされる(経済産業省2020).
- 5) 北海道文教大学における関連実践としては, 健康栄養学科の教員・学生による「食育教室」の実践(木藤ら2020: 71-86)や, こども発達学科の「チャレンジド教室」(北海道文教大学人間科学部こども発達学科〔チャレンジド教室〕2019)などがある.
 - 6) そもそも, 「社会人基礎力」を基準にする学生評価は, 企業に「雇用される能力(エンプロイアビリティ)」を植え付ける危うさを含んでいるとの批判もある(児美川2015: 196-197). それはまた, 学生を企業に尽くす「人材」として「適応」(児美川2007: 142)させるような「キャリア教育」を無批判に受け入れることにもつながりかねない.
 - 7) もともと「ENIWA学」は, 北海道文教大学学生のための学長裁量経費による教育改革プロジェクトとして, 2019年度に採択された事業である.
 - 8) 「ENgeki In Workshop and Activity」という呼称を最初に筆者に提案したのは鈴木敏正である.
 - 9) 「ポストドラマ」とは「劇場」・「舞台」・「客席」といった所与の固定的な場所に限定された「演劇らしい演劇」ではなく, それらの制限を越える柔軟な方法によって, 広く文化的事象をとらえ, 表現する営みとしての演劇的活動をさす(早稲田大学演劇博物館編2014: 8).
 - 10) 「ENIWA学」は2019年8月からはじまった. 柱となる活動は, フィールドワーク, KJ法研修会, 演劇ワークショップ, リーディングシアターの上演である. フィールドワークによって記録したテキストデータを持ち寄り, KJ法の研修を受けた上で, データから恵庭の文化的課題に関する仮説を立てる. その上で, 学生による文化の発信を「朗読劇」として地域のホールで上演するというものである.
 - 11) 加藤, 吉岡, 笠見はこども発達学科, 鈴木は健康栄養学科所属である.
 - 12) 質的研究法では, 共同研究者に対して, 記述の公正性や客観性を保証するために確認を求めることを「メンバーチェック」と呼ぶ(デンジン, リンカン2006: 58).
 - 13) 『漁川物語』は, 大学図書館の「郷土資料コーナー」に配架されていた.
 - 14) 初版本は現在, 恵庭市立図書館に所蔵されている. それとは別に恵庭市教育委員会が発行した印刷本がある.
 - 15) 潤色とは, 原作を部分的に加除することを意味する.
 - 16) ただし, ゼミ生らは, 演劇脚本の構成自体初めてであり, NとK及び加藤が進めた潤色原案に対しては部分的修正のみで, それ以外はほとんど手を加えることはなかった.
 - 17) 呼吸も発声も「丹田」によって支えられるものであるとの説明をし, 実際に丹田による呼吸から発生への流れを繰り返し確認させた(鴻上尚史2012: 56-60).
 - 18) 「恵庭学」とは, 加藤のほか, 『漁川物語』の脚色・潤色に関わった自主的参加の学生, ゼミ生を含む総称的ペンネームである.
 - 19) 内倉真裕美氏. 『漁川物語』製作当時, 保護者として, 出版活動に協力した人物である.

文献

- 花田朋美, 山岡義卓, 白井篤(2012)「自主参加型の地域連携プロジェクトによる大学生の学習効果—社会人基礎力評価からの考察—」(東京家政学院大学『東京家政学院大学紀要』第52号)

- 北海道文教大学人間科学部こども発達学科編〔チャレンジド教室〕2019)『学生の心を拓き耕す～平成30年度の軌跡～』北海道文教大学人間科学部こども発達学科
- 伊熊克己(2016)「学生のスマートフォン使用状況と健康に関する調査研究」(北海学園大学『経営論集』第13巻第4号)
- 伊藤茂樹(1999)「大学生は『生徒』なのか—大衆教育社会における高等教育の対象—」(『駒澤大学教育学研究論集』第15号)
- 漁川保護少年団, 吉弘文人(1991)『漁川物語』恵庭市立恵み野小学校
- 経済産業省「人生100年時代の社会人基礎力」経済産業省ホームページ(2020年2月5日取得, <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku>)
- 木藤宏子・手嶋哲子・小塚美由記・白幡亜希(2020)「北海道文教大学『食育教室』実施記録〔2017～2018〕」(北海道文教大学『研究紀要』第44号)
- 児美川孝一郎(2007)『キャリア教育のウソ』明石書店
- (2015)『まず教育論から変えよう 5つの論争に見る教育語りの落とし穴』太郎次郎社エディタス
- 鴻上尚史(2012)『発声と身体のレッスン 魅力的な「こえ」と「からだ」を作るために 増補新版』白水社
- 舛井雄一(2019)「大学生参加型の「域学連携」まちづくり(3)」(國學院短期大学『國學院短期大学紀要』36巻)
- N.K. デンジン, Y.S. リンカン編(平山満義監訳, 藤原顕編訳2006)『質的研究ハンドブック2巻: 質的研究の設計と戦略』北大路書房
- 佐藤郁哉(2002)『フィールドワークの技法』新曜社
- ショーン(佐藤学, 秋田喜代美訳2001)『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える—』ゆみる出版
- 杉谷祐美子(2018)「『生徒化』している大学生と『学生化』への移行」(ベネッセ教育総合研究所編『第3回大学生の学習・生活実態調査報告書』)
- 鈴木敏正(2019)「市民性教育と児童・生徒の社会参画」(『北海道文教大学論集』第20号)
- 豊田光世, 内平隆之, 井関崇博, 中嶋一憲(2014)「大学の地域貢献活動の教育効果に関する考察—Enactusの事例をもとに—」(兵庫県立大学環境人間学部『研究報告』第16号)
- W.J. オング(桜井直文, 糟谷啓介訳1991)『声の文化と文字の文化』藤原書店
- 早稲田大学演劇博物館編(2014)『ポストドラマ時代の創造力 新しい演劇のための12のレッスン』白水社
- 山岡義卓(2014)「企業との連携によるプロジェクト型授業の運営および大学生の学習効果について」(神奈川大学『国際経営論集』No.47)
- ユヴァル・ノア・ハラリ(柴田裕之訳2016)『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福(上)』河出書房新社
- (2018)『ホモ・デウス テクノロジーとサピエンスの未来(上)』河出書房新社

**The Teachers' Support of the University in the Education of Community
Participation Type:
The Case Study of Reading the Play *The Story of The Izari River* in the Educational
Reform Project *Eniwa Studies***

KATO Hiroaki, YOSHIOKA Akiko, KASAMI Yasuhiro and SUZUKI Toshimasa

Abstract: In this paper, we described the teachers' support of the university in the educational reform project *Eniwa Studies* at Hokkaido Bunkyo University. We analyzed various records, especially about the practice for reading the play *The Story of The Izari River*. The results are as follows: First, students experienced dialogue with Eniwa citizens about history and culture of the ENIWA area through actively reading the play and interchange between students and the audience after the play; second, by receiving worthy praise for the play from the audience, students learned the necessity and significance of working together with their colleagues and got motivation to create culture for the community; and third, by practicing the project, we showed how to incorporate area culture into the "Basic Seminar." To summarize: First, it is necessary to examine how to support students in participating in the local community more actively; and second, it is necessary to examine how to support students to help them collaborate closely and to build trust more deeply with each other.

Keywords: *Eniwa studies*, *The Story of the Izari River*, education of community participation type, educational reform project, collaborate